

Title	文明史観における政治思想
Sub Title	Political thought as a historical interpretation of civilization
Author	多田, 真鋤(Tada, Masuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1988
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.61, No.5 (1988. 5) ,p.7- 27
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	法学部政治学科開設九十周年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19880528-0007">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19880528-0007</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 文明史観における政治思想

多田真鋤

- 一、文化哲学としての文明論
- 二、指導者論
- 三、平和論
- 四、民族論
- 五、むすび

## 一、文化哲学としての文明論

二〇世紀に入って、一九世紀までにはさほど顕著にあらわれなかった文明論や文明史観が、ヨーロッパの思想界に  
あいついでにわかに登場してきた。すなわち、一九世紀までのヨーロッパ精神史に、時においてはみうけられた文明  
論や文明史観は、哲学や歴史、宗教や文化を対象とした学者や思想家たちのいわば余技というか、副産物 (Zubehör-  
ding) ともいうべきものであったのであるが、第一次世界大戦の終結を契機として、それらは文化哲学とも称すべき

学域を形成するまでに本格的、専門的なものに熟成してきたのである。

この小稿において取扱うO・シュペングラーをはじめとして、一九三〇年代までに、A・トインビー、A・シュバ  
イツァー、N・ベルジャエフ、G・ジンメル、C・ドーソン、L・マンフォード、K・ヤスパース、K・マンハイム、  
G・Y・オルテガ等々の文明論が相次いでヨーロッパの精神史を彩ってきたのである。<sup>1)</sup>

主として二〇年代以降にあらわれた文明論や文化哲学は、第一次世界大戦勃発を契機とした技術革新に伴って生じ  
てきたものである。

すなわち、技術化、機械化、工業化、および大衆社会化という現代状況において、文明と人間、技術と人間、機械  
化と人間、それらとの関連における人間疎外を問題視し、それを中心課題として形成されてきたものである。そして、  
これらの文明批評の二〇世紀の先駆をなしたものは、シュペングラーであったと言っても過言ではない。

トインビー史学の研究に、永年にわたって従事しておられる山本新教授は、「トインビーはシュペングラーの構想  
のすべてをうけた。

この先行者がいなかったならば、トインビーといえども、雄大な発想を実践にうつして悔いなく決意にいたらず、  
いわんやその入念な仕上げをなしとげえなかったであろう。

新しい研究分野の本格的な開拓はシュペングラーによってなされ、一九三〇年代にかれにつづく多くの第一級の文  
明批評家によってふみかためられ、不動のものとなった。トインビーやマンフォードはむろんのこと、ソロークンに  
せよ、クローパーにせよ、A・ヴェーバーにせよ、シュペングラーがいなかったら、その主著をかいたかどうかわ  
からないほど、初代の開拓者の業績は大きく、また斬新であった<sup>2)</sup>と、現代文明論の系譜におけるシュペングラーの  
存在を位置づけておられる。トインビー自身もその論説「わが歴史観」において、次のように述懐している。「時あ  
たかも一九二〇年の夏のこと、ナミアー教授がやって来て、シュペングラーの『西洋の没落』の一卷をわたくしの手

中に委ねた。(中略)この本のページを静かに繰りひろげてゆくうちに、最初わたくしは、わたくしの全研究がすでにシュペングラーによって、解答は申すまでもなく、問題それ自身が未だわたくしの頭のなかで完全な形をなしていない矢先に、すでに解決済みになっているのではないかとひどく考えこませられたのである。」と語っている。

しかし、シュペングラーの場合においては、彼以後の文化哲学者や文明論者に比較して、政治的現実の世界により深くかかわったのである。すなわち、一九一四年の第一次世界大戦の勃発、ドイツの敗北と帝政ドイツの崩壊、ワイマール共和国の成立、荷酷なヴェルサイユ条約体制という一連の歴史的イベントが、彼をして政治的世界への関心をいやがうえにも高め、文化哲学の領域から政治哲学への領域へと導いて行ったのであった。<sup>(4)</sup>

シュペングラーの体系的な伝記を著したA・M・ユクターネク (Anton Mirko Koktanek) は、シュペングラーとヒトラーを対比しながら次のように指摘している。すなわち、「シュペングラーとヒトラーの二人を並べていろいろ思い浮べてみることは歴史の魅力というものである。(中略)二人とも一九一四年の戦争勃発を生涯の最大の出来事と感じ、一九一九年には戦時中確信を強めた原理や見解をいだいて政治の世界へ身を投ずる。二人とも一九一八年の革命、共和国、ベルサイユの講和に対して激しい嫌悪の念をもち、二人ともドイツを現状から救い出し、ヨーロッパの有力な勢力たらしめようとする情熱に燃えている。二人とも世界史の決め手となるものがドイツのそのような強国としての地位にあることを確信しきっている。(中略)この二人の切望しているところは当時それほど相違していない。ベルサイユ条約の廃棄、勢力範囲の中核となる強力な帝国、民族主義、『ドイツの社会主義』議会制度をとらない強権的指導といったものがそれである。」<sup>(5)</sup>と述べている。

シュペングラーは、その初期の学位論文である「ヘラクレイトス——その哲学のエネルギー論根本思想に関する研究」(Heraklit Eine Studie über den energetischen Grundgedanken seiner Philosophie)から、主著「西欧の没落」を経て、最後の著述「人間と技術」(Der Mensch und die Technik, Beitrag zu einer Philosophie des Leben, 1931)に至る独自の文

明史観に即した著作活動の間に、主として一九一九年から二六年に至る数年間に、政治論説を著述しその独自の見解を披瀝している。その主たるものは、著名な「プロイセン精神と社会主義」(Preussentum und Sozialismus, 1919)であるが、それ以外にも、「ドイツ青年の政治的義務」(Politische Pflichten der Deutschen Jugend, 1924)、「世界政治の新形態」(Neue Formen der Weltpolitik, 1924)、「フレンツ国家の再建」(Neubau des Deutschen Reiches, 1924)等の諸論説が、一九三二年一月「フレンツ」で公刊された「政治論集」(Politische Schriften, 1932)に収められ、また彼の姪のビルドガルト・ロルンホルトによって編集された「講演集」(Reden und Aufsätze, hrsg. von Hildegard Kornhardt, 1937)に於ての政治観を窺える諸論説が収録されている。

この小稿においては、一九二四年以降三六年に至るフレンツラーの政治論説と講演のうち、従来とかく看過されがちであった二・三の小論を中心に照明をあててみようと思ふ。

- (一) Arnold, J. Toynbee, a Study of History vol. I-II, 1933, vol. IV-VI, 1939. Albert Schweitzer, Verfall und Aufbau der Kultur, 1922. N. Berdyayev, The End of Our Times, 1933. G. Simmel, Der Konflikt der modernen Kultur, 1918. Ch. Dawson, Modern Dilemma, 1932. L. Mumford, Technics and Civilization, 1934. K. Jaspers, Die geistige Situation der Zeit, 1931. K. Mannheim, Man and Society in an Age of Reconstruction, 1940. G. Y. Ortega, La Rebelion de las masas, 1930. 等々の現代文明論は、一九二〇年代以降四〇年代前半にかけて、多数公刊された。そしてまた、第二次大戦の終結を以て「この学問的系譜は再現しよう。例えば Sorokin, P. A., Social Philosophies of an Age of Crisis, 1950. Guardini, R., Die Ende der Neuzeit, 1951. Carr, E. H., The New Society, 1951. De Man, H., Vermassung und Kulturverfall — Eine Diagnose unserer Zeit, 1952. Lukács, G., Die Zerstörung der Vernunft, 1954. 等々をあげよう。

- (二) 山本新著「文明批評家トインビー——フレンツラーとの出会ふ——」(トインビー 人と史観 社会思想研究会編 昭和三二年刊所収) 五〇頁参照。

- (三) A. J. Toynbee, Civilization on Trial, 1948. 深瀬基寛訳「試練に立つ文明」二二—二四頁参照。トインビーは「私がフレンツラーの本のなかを探して、諸々の文明の発生理由について私の懐いていた疑問の解答を求めてみると、私としてなす

べき仕事が多くともまだ私にも残されていることを知りました。すなわち、この点については、シュベングラーの考えは甚だしく独断的であり、決定論的であって、明知的光彩に甚だ乏しいという印象をどうしてもまぬがれなかったからです。(中略)ドイツ流の先験的方法というものが、空くじを引いたからには、ひとつイギリス流の実験主義で以て何とか始末がつかないものであろうか。右の方法に代る可能な説明を事実の光に照して試験してみても、その説明がどの程度まで試練に堪え得るものかどうかためしにひとつやってみようではないか。」と述懐している。岩崎武雄教授は、その「文明論と哲学」の論説において、「シュベングラーは各文化をそれぞれ一つの有機体と考え、文化の生成消滅を有機体の寿命と見る点で生物学的形而上学の上に立っているが、トインビーはかかる形而上学を持たず、各文明のたどる過程を、その文明が異種の文明と遭遇することによって生ずる異種の文明からの挑戦(Challenge)とそれに対する反応(response)という形で説こうとする。この点でトインビーはみずから言うごとく、シュベングラーのような『ドイツ流の先験的方法』を退け、『イギリス流の実験主義』によろうとしているのである。」(講座現代の哲学VI 現代文明論 昭和三十三年所収)と指摘しておられる。

(4) 拙著「近代ドイツ政治思想研究—ナチズムの理念史—」(昭和四三年刊)第三部第五章「近代ドイツにおけるIrrationalismの展開」において、チェンバレン、ローゼンベルクらとともに、シュベングラーの政治観について若干触れてある。現代のが国で、シュベングラー研究に傾注しておられる八田恭昌教授は、「シュベングラーの主要な関心が、経済よりも政治に向けられていた事実は、注目されるべきであらう。(中略)政治はさし迫った現実の諸問題の解決を要求する。『西洋の没落』の著者が、そのアプローチの眼をより過去の文化乃至文明の歴史に向けたとすれば、敗戦後の著者の眼は、より一層現在の政治に向けられた。(中略)政治論におけるシュベングラーはもっと建設的である。そこには否定の影はうすれて、力強い命令形をもって書かれた断定の言葉のみが響く。」(オスヴァルト・シュベングラー—人と思想— Hildegard Kornhardt, Oswald Spengler—Gedanken, 1941 八田訳シュベングラー「運命・歴史・政治」昭和四二年刊所収)。

(5) Anton Mirko Kofranek, Oswald Spengler in seiner Zeit, 1968. 南原・加藤訳「シュベングラー—ドイツ精神の光と闇—」昭和四七年刊、一七〇—一七一頁参照。

ヒトラーは、「Mein Kampf」において、一九一四年の第一次大戦勃発について次のような述懐をしている。

すなわち、「私自身には当時の瞬間が青春時代の腹立たしい感じからの救出のように思えた。私は嵐のような感動に圧倒されて、くすおれていた。そしてこの時にめぐり合う幸運を与えたもうた神に溢れる思いで感謝したと、いまでもためらうことなく言うことができる。」と、第一次大戦の勃発に対しての感慨を語っている(Adolf Hitler, Mein Kampf, 1943. S. 177)。シュペングラーとヒトラーに関して「German Democracy and the Triumph of Hitler, edited by A. Nicholls and E.

Mathias, London 1971, pp. 19-22 参照。

アメリカのプラグマティズムの著名な思想家ジョン・デューイ(John Dewey)は、その著「German Philosophy and Politics, 1942」において、次のような見解を述べている。「私が推測するに、ヒトラーは他の思想家たちの誰にもまさってシュペングラーを受けつげなかったと思われる。なぜなら、『西洋の没落』というシュペングラーの観念は、ヒトラー自身の目論見、すなわち彼の指導の下で西洋を復興させ、西洋に未曾有の卓越した地位を与えようとする目論見と、真向うから敵対する観念だったからである。にもかかわらず、彼がシュペングラーの次の言葉からインスピレーションを得たことは疑いえない。『物質的富を廃棄し、それにまつわる権力を粉砕することができるのは、ひとり血のみである。生命こそアルファでありオメガである。歴史において重要なのは、血の質、意志の勝利としての生命、しかり生命のみである。』と両者の思想上の接点を指摘している。

## 二、指導者論

シュペングラーの政治思想において、その中核をなす主張は「指導者論」である。

すなわち、シュペングラーによれば、「政治は制度や体制に左右されるものではなく、人間の個性 (Persönlichkeit) に左右されるものである。それゆえ、すべての個々の企業と同様に、民族全体の経済組織においても究極においてはただ人間の個性の信頼しかない」と断言している。まず彼の指導者とその責務についての見解を、一九二四年五月の講演「Aufgaben des Adels」<sup>(2)</sup>をとりあげて考察してみよう。「この革命(一九一八年ドイツ革命)によって、政治を成功させるに足る前提条件となるものがすべて破壊されてしまった。民族の内部において一つの組織的な階層であるべき貴族の社会的、政治的構成も同じく破壊してしまった。いかなる国家も解決し克服しなければならぬ内外の幾多の政治問題をかかえている。そしてこのような問題の解決には、すべてが一体となって思慮し、行動するような階層の存在が必要不可欠なのである。もし、このような指導的階層が存在しなければ、内外の重要課題を首尾一貫して全体として解決することは到底不可能なことなのである。ドイツではこの指導階層が革命によって、その根底から打撃を受

けたことは最大の不運であるといえよう。」といい、さらに「一民族の内部に存在する真の貴族は、すべて純粹文化における『種族』なのである。血統のみに限らず、指令したり組織する本能、交渉したり自己責任を感じる本能、要約するならば、国民生活の実際の全局面におけるあらゆる領域でその卓越した本能によっても一般と区別されるものである。すなわち、貴族とは真の政治的身分なのである。」と述べるが、彼によれば、政治的身分の体现者たる貴族は、いわゆる「階級秩序」(Klassenordnung)としての存在ではなく、それはあくまでも「階層秩序」(Rangordnung)として把握され、顕示されるものなのである。ドイツは三〇年戦争以来、政治的に統一もできず、またイギリスやフランスにあらわれたような高度な市民社会をも形成しえなかったので、指導者層としての貴族階層の存在が必要不可欠なのであったが、それが根底から崩れ去った今日はこの階層を再興する試みが至上命令であるという。そして、その再興に当っては、単に旧秩序を恢復し、特権を旧に復するというのではなく、熟慮を重ねた教育によってのみ成就しうる。とシュペングラ―は考えている。そして彼は、イギリスの伝統的政治社会に範をもとめ、政治教育の重要性を強調するのであるが、彼によれば、その政治教育は大学の講義を受講したり、書籍や新聞を読むことによっては修得することはできず、あくまでも政治的本能を鋭敏に鍛えることによってのみ形成されるものなのである。<sup>(4)</sup>

「世界大戦以来の世界情勢において、最終的な決断をくだしうるすぐれた能力をもつ指導的階層を所有する民族が、他の民族を抑制して最後の勝利を獲得しうるのである。軍隊を喪失したか否か、経済が混乱しているか否か、海外の植民地を喪失してしまっただか否か等々は問題ではなく、指導的階層が存在しているか否か、そしてまた国民の意欲が活性化しているか否かが重要な問題なのである。」と述べ、古代ローマ史を引用し、傍証しながらこの問題を弁証するのである。

「われわれドイツ国民は、この一世紀においていかなる他国民も遭遇しなかったような厳しい現実<sup>(5)</sup>に立たされている。われわれは周辺を切斷された一つの島のような状態で生存しているといえよう。われわれは自らの国家の主人ですら

なく、ドイツ領内でドイツの貨幣を支払ってまでもフランスの軍隊をかかえている状態である。

しかし、この窮境にあつてもこれからロシアと内政危機に当面しているイギリスとの間で、卓越した政治手腕でよりよく立場を変えてゆくことは可能なのである。それには、かつてのプロイセン精神の特質であつた規律を重んじ責任を荷う欲びをもつ、ドイツ人本来の政治的能力を備えた人材を養成してゆかねばならない。（中略）ドイツ人は政治の諸問題をあまりにも内政的に、また地方的に考えている。『郷土』（*heimatliche Scholle*）は、健全な民族の根源であり、とくに健全な貴族の源泉ではあるが、政治問題に関する考察の視野においてはならないものである。』といひ、政治を狭い郷土愛の立場においてではなく、世界的パースペクティブに立脚しながら、把握すべきことの急務を語っている。すなわち、政治の衝に当るものは、太平洋沿岸、南アフリカ、北アメリカ等々で起るさまざま諸事件を念頭におき、マス・コミ等を通じて情勢の把握に専念し、政治の視野を世界的なものに拡張しなければドイツの置かれた窮境から脱することは不可能であると説く。

さらにシュペングラ―は、「われわれドイツ国民はあまりにも短期間に成長してきた。祖父の時代には規模の小さい領邦国家体制であつたのであるが、それから五〇年とはたつていないのである。そのため政治一般に対する視野も狭く、イギリスでは慣用化されている世界政治（Weltpolitik）という用語すら認識してはいなかった。この政治的視野の狭隘さはいまだに克服されてはいないのである。中略、われわれは一夜にして世界的な工業や貿易、そしてまた海軍力をも保有する国民となり、そのため多くのドイツ人が、経済の領域や利害の目的を、国民的なものではないと感じている。すなわち、ドイツ人の視野が地方的な領域や利害の範囲を越えてはならないからである。」といひ、イギリスの場合には、海外の広域社会での活躍が一八世紀以来可能であつたのに比較し、ドイツの場合ではそうでなかつたことを指摘する。「第一次世界大戦前のドイツの青年たちは、海外に飛躍する機会に乏しかつた。インド、エジプト、アメリカに代るものが講堂であり、学生組合であり、任官試験なのであつた。（*Statt Indien, Ägypten, Amerika hieß es*

Hörsaal, Korps, Assessor)」<sup>(5)</sup>といい、国際政治の局面に、プラクティッシュに参与できたイギリスの青年たちと比較して、ドイツの青年の国際感覚の欠如を憂慮している。そして、戦勝国に対して偏狭なナショナリズムでこれに対抗することは大なる誤りであり、視野の狭い、いわゆる過去の理想へ回帰する行動のみに終始したら未来への展望は開かれなことは必定であり、世界政治をそのバースペクティブのなかに位置づける政治感覚の新鮮さを、貴族と青年層へ要望している。以上がシュペングラーの講演の要旨であるが、指導者階層は世襲貴族としてではなく、世界政治の視野を、実地の検証と経験に基づく教育によって把握し、過去を志向し、過去の理想へと回帰する偏狭なナショナリズムから脱却しながら、内外の政治の実践を遂行しうる指導者像に求めている。

第一次大戦敗北後、四年しか経ていないこの時期に、このような見解を採ったシュペングラーの政治感覚は、「西欧の没落」の著者としての、独特な文明史観に依拠したものであると言えよう。ワイマール期におけるシュペングラーは、ナチズムの先駆思想の保守革命派の優力な思想家の一員とみなされているのであるが、この講演における彼の<sup>(6)</sup>見解は、決してそのような断定を降しえないものであることが証されるものであると言えよう。

(1) H・ホルンハルト、八田訳前掲書八五頁。

(2) O. Spengler, Aufgaben des Adels. Rede, gehalten am 16. Mai 1924 auf dem Deutschen Adelstag in Breslau, in Reden und Aufsätze, 1937.

(3) Ernst Stutz, Oswald Spengler als politischer Denker, 1958. SS. 104-106 参照。

(4) シュペングラーに於いては、本来の政治教育法は躰け(Zuch)とびびり、教養(Bildung)とびびり。E. Stutz, a. a. O., SS. 101-104. 参照。

(5) O. Spengler, a. a. O., S. 93.

(6) Jean F. Neuhoff, Der Mythos vom Dritten Reich, Zur Geistesgeschichte des National Sozialismus, 1957. S. 61-62. ノイロルによれば、「すべて一九二〇年から二四年に至るこの数年の間に、シュペングラーとメラー・ヴァン・デン・ブルックが新国家主義の二、三の主要なテーマを提出していた。二人がその出発点としたのは、ドイツ民族は、十一月革命が作り

あげた政治的、社会的形態のなかで生活を続けることに満足してはいない。何年か、または何十年か、その真の目標に到達するまで、革命は人々の胸裏において前進しつづけるであろう、ということにあった。そしてその真の目標というのはシュペングラールによれば、プロイセン精神に基づいた社会主義革命であり、メラールによれば、国家主義的保守革命であった。」と述べている。

なお、ワイマール時代における、反民主主義思想に関しては、Kurt Sontheimer, Antidemokratisches Denken in der Weimarer Republik, Die politischen Ideen des deutschen Nationalismus zwischen 1918 und 1933, 1968. および「保守革命論」については、蔭山宏著「ワイマール文化とファシズム」（みすず書房一九八六年刊）において、「保守革命論の歴史的位置（四章）」、「保守革命Ⅱ革命的ロマン主義」（五章）および「保守革命論とナチス」（六、七章）等の諸論説において詳細な分析がなされ、論述されていることを付記しておく。

### 三、平和論

「平和主義、または不戦主義とは、生来の非平和主義者に支配を委ねることである。」(Parisismus heißt, den geborenen Nichtkämpfern die Herrschaft überlassen. . .)と断言し<sup>(1)</sup>、「世界平和は、……大多数の者が抱く私的な戦争放棄を含んでいる。しかしそれと同時に、戦争を放棄しない他国の餌食になる用意も、そのなかに秘かに含まれている。

それは国家を破壊する世界宥和の願いととも始まり、災禍が隣国を襲っただけではや何びとも手を出さぬという事実とともに終るものである。」<sup>(2)</sup>とシュペングラールは述べている。

ここでは一九三六年に彼の死の直前に語った「Ist Weltfriede möglich?」をとりあげ、その世界平和の思想、平和主義についての見解を考察してみようと思う。

一九三六年五月七日の夜半に心不全で死去したシュペングラールは、一九三三年政権獲得後、次第に権力を確立し勢力を拡張しつつあったヒトラーおよびナチスの領袖との間に対決の姿勢を示し出していた。すなわち、一九三三年八

月、彼の最後のまどまどした政治論説である「決断の年——ドイツと世界史的展開——」(Jahre der Entscheidung—Deutschland und weltgeschichtliche Entwicklung—1933) が出版され、その著述において容赦なく「ヒトラーの第三帝国」を批判したからであった。

この書「決断の年」において彼は、「私がいままで政治について書いてきたものすべては、敵と結託しながら私たちの犠牲のうえに私腹を肥やし、私たちの未来を踏みにじって顧みない権力に向っての抗議なのである。

その一字一句には、こうした政権打倒の執念がこめられていたのである。」といい、ナチスの政権樹立前後の状況に對して、「はかり知れぬ大きな危険を孕んだ賭であり、ドイツ一國だけでは決定できる問題ではなく、外の戦争と破局の世界にかかわることなのである。……現在の政権奪取は、強弱入り乱れての破乱のうちに行われた。なぜまた、大騒ぎをして祝わなければならないのか、私は胸中に湧き上る一抹の懸念を押えることができないのである。……歴史は、感傷的なものではない。感傷に溺れるものは不幸なるかな。」と、ナチス政権確立によって戦勝気分にも似た民衆の祭り騒ぎに冷水をあびせている。

そして最後の章において「私たちは既に第二次世界大戦をすぐ目の前にしているのかもしれない。国際政治の力の分布は変り、新しい軍事的・経済的・革命的手段や目標が現われてくるであろうが、私たちには何一つ確かなことを予見できない。……ドイツは島国ではない。もしも、世界全体とドイツとの関係こそがもっとも重要な問題であることを忘れるならば、私たちは無残にも恐ろしい運命の下敷になるであろう。」と述べているが、一九三三年の、しかもヒトラーのナチス新政権がドイツの民衆に華やかに迎えられ、世界史もその転換の期を画そうとしていた時期に、このような予見をなしたことは、その稀有な文明史観によるものと言わざるをえない。

テオドール・W・アドルノ(Theodor W. Adorno) は、その講演「没落後のシュペンングラー」(Spengler nach dem Untergang) において次のようなことを語っている。

すなわち、「彼の国家社会主義者たちとの関係、ヒトラーとの争い、さては彼の死に対してまで注目する人はまずいなかった。ドイツでは彼は、ちょうどその頃の紳士たちの言葉遣いによると、悲観論者であり反動だとして追放され、国外では野蠻への逆行についてイデオロギー的に責任の一端を負う者だとされた。……しかし彼の予測をいままた思い起してみると、世界史自身の歩みが、驚くほど彼の予測がそっくり正しいことを証明している。シュベングラ―を忘れたがために、かえって彼の説の正しさがその報いとしてわれわれに迫ってくる。中略、もつとも特色のある予言は大衆支配の問題、プロバガンダ、大衆芸術、それから政治的支配の形態、とくに民主主義が自己から出て独裁政治へ激変するある種の傾向に関するものである。」と、アドルノはシュベングラ―を評価している。

さて、「世界平和は可能なりや？」との小論は、一九三六年の彼の死の年に、アメリカのラジオ放送局からの質問に対しての短い答えであり、ここにその概要を述べてみよう。世界平和が可能であるか否かという設問に対しては、世界史をよく認識した者でなければこれに答えることは不可能である。世界史を正確に認識している者とは、人が過去においていかに生きてきたか、そして今後いかに生きてゆくかについてよく識る者のことである。未来の歴史がいかに変化してゆくのか、またどのように変化されてゆくかを観察できるか否かで大なる相違が生じてくる。大多数の人々はその相違を理解することは決してないのである。

平和とは一つの願望であり、戦争は事実なのである。人間の歴史は、人間の願望と理想に関しては全く関与してこなかった。生活とは、植物、動物、そして人間における闘争であり、さらにまた個人間の、社会における階級間の、諸国民と国家間の闘争でもあり、それは経済的、社会的、政治的、あるいはまた軍事的形態を採って演じられるかどうかなのである。権力をめぐる闘争とは、その意志、利得、または必要な見解や正しい見解を貫徹することなのである。そしてもし他の手段が奏功しなければ、最後の手段として武力がくり返しあくことなく使用されるであろう。

武力を用いる個人を犯罪者と称し、階級に属するものを革命家とか反逆者と称し、民族によるものを惨虐と称して

も、すべては事実であることに変わりはないのである。現今の世界共産主義は、戦争を蜂起、植民地奪回を異民族からの解放と名づけている。そしてもし世界が一つの統一国家になったら、人々は戦争を反乱と称するであろう。これらはすべて用語の相違にすぎない。今日、白色人種のみが世界平和について語り、数多の有色人種が語っていないことは危険な事態である。個々の思想家や理想主義者が世界平和を論じても——いかなる時代でも彼らはそうであったが——なんらの効果もないのである。しかし、もし全民族が平和主義的になればそれは老衰の徴候なのである。種族が強健で疲労困憊していなければそのようなことにはならない。平和主義的理想は生の実相に矛盾する最終段階を意味し、未来の放棄なのである。人間の生々発展がある限り、戦争は存在するのである。しかし、もし白色人種が戦争に疲れてしまい、国家がいかなる事情があっても戦争ができなくなれば、ローマ帝国がゲルマン民族の支配に服したときのように、世界は有色人種の犠牲になるであろう。平和主義とは、生来の非平和主義者に支配を委ねることなのである。今日、アジアで白色人種に対して大規模な反乱が起きれば、数多の白人はそれに参加するであろう。なぜなら彼らは平和の生活に倦怠しているからである。平和主義は理想として、戦争は現実として変らないのである。そして、もし白色人種が、戦争をしないことを決断したならば、有色人種がそれを実施し、世界の支配者となるであろう。

以上がシュペングラーの「世界平和」および「平和主義」に対する見解の一端である。

彼がこの世界平和に対する見解を発表し、そして死去した前年の一九三五年一〇月には、イタリアのエチオピアに対する全面的な侵略が開始され、ヒトラーはこの状況を利用して、イタリアへの接近をはかるとともに、ラインラントの再武装化をも実現したのであった。ラインラントの再武装化はドイツの主権の完全な回復、政治的・戦略的地位の改善を意味したが、それはまたヴェルサイユ条約、ロカルノ条約で確認されたフランスの安全保障に決定的な意味をもっていたから、フランスが軍事的対抗措置をとる恐れは十分にあった。しかし、ヒトラーは、フランスが対抗措

置をとるまいと賭け、一九三六年三月にライン非武装地帯に進駐したのであった。この年一月、ムッソリーニはミラノでの演説で独伊「枢軸」を誇示し、一月二五日に日独伊防共協定が締結されたのであった。<sup>(7)</sup>このような時代状況を背景としてのシュペンングラーの所説は、まことに興味あるものであり、単なる時事解説ではなく、アドルノの指摘にもあるように、文明史観に基づいた「平和論」であるといえよう。<sup>(8)</sup>

(一) O. Spengler, *Reden und Aufsätze*, 1937, S. 293. シュペンングラーの姪にあたるヒルデガルト・コルンハルトは、前掲書「O. シュペンングラーの思想」(Oswald Spengler, *Gedanken*, 1941)の序文において、次のようなことを述べている。すなわち、「シュペンングラーはそのあらゆる思想をまず始めに断章の形で書きおろそうとするのが常でしたし——彼の使う言葉の『碑銘めいた』響きも、幾分それに基づいています。——また、政治論文は特にそうなのですが、彼の論文の多くは、まさしく断章集から生まれたものであるからです。それだからこそ、数々の文章が、何ら支障をきたさずに文脈からとり出される場合が多いのです」。

(二) H. コルンハルト、八田訳前掲書七二頁。

(三) Ist Weltfriede Möglich?—Telegraphische Antwort auf eine amerikanische Rundfrage, 1936, in O. Spengler, *Reden und Aufsätze*, 1937, SS. 292-293.

(四) A・M・コクターネク、前掲書三四九—三五〇頁参照。

(五) A・M・コクターネク、前掲書三五〇頁。

コクターネクは、シュペンングラーはまた革新自体の墮落の危険を警告している、と述べ、シュペンングラーの「一度政權の座についてみれば、その座にぬくぬくとおさまり、一時の手段であるべきその座を永久に離れようとしな。正義は、狂信的に押し進められて、遂にはそれ自体の破壊に至る。初めは偉大であったものも、やがては悲劇、あるいは喜劇に終る」との言葉を引用している。さらにまた、シュペンングラーのこの書「決断の年」は、コクターネクによれば「この本は『西欧の没落』以上によく売れた。……ふだんはシュペンングラーに批判的な人々も、齒に衣をさせぬ第三帝国の批判に拍手喝采した。事実、この本は、第三帝国の時代にドイツで発表された保守的な抵抗の唯一の宣言であった。」と述べている。(三五二頁)

(六) Theodor W. Adorno, *Spengler nach dem Untergang*, in *Gesammelte Schriften* Band 10, I, 1977, SS. 47-49.  
また、アドルノは、「シュペンングラーは自由主義の批判において、進歩派の批判よりも多くの点において優れている極端な

反動の理論家の一人である。それが何故であるかを研究してみる価値がある。」(63)とシュベングラを評価する。

(7) 林健太郎編「ドイツ史」四四一—四四二頁。

(8) 八田氏は、前掲の論説において、シュベングラにとって「世界平和」とは、歴史のなかに観念理想をもちこむものである。和解し得る時がありとすれば、それは闘争の永遠の終末、すなわち死を意味するものでしかない。……常に現実を超えた立場から現実をつかまんとするシュベングラにとっては、古い伝統の視野の狭い殻に頑強に閉じこめることは、明らかにその本意ではなかった。シュベングラは一介の国粹主義者ではない。強い民族意識を抱きつつも、彼の眼はたえずこれを越えた世界政治に向けられていた。」と述べられている。

#### 四、民族論

シュベングラは、一九二七年に「Von Deutschen Volkscharakter」<sup>(1)</sup>という一文を著わしている。「一民族の性質は、その民族の運命の所産である。国土でもなく、季候でもなく、空や海でもなく、また種族でもない。これらは歴史的現実の衝撃によって形態が鍛造される素材にすぎない」との独特な文章ではじまっている。彼によれば、教養、すなわち話したり、書いたり、読んだりするような事柄は、民族の性質の形成には影響を与えないものである。民族性を形成するものは、成功ではなく、それはむしろ苦悩であることを歴史は証明しているといい、古代ローマ史を例証する。あたかもまっすぐな銃身のような特性をもつ民族もあれば、自らも理解し難く、まして他の誰からも理解できないような沈黙した民族もある。イギリス人は誰にも謎をかけたことはない。イギリスの歴史は流血の歴史でもあったが、曲折もなく、動揺もなく、不意の出来事もなく、まっすぐな道を歩いてきている。ドイツ人はそれに対比して謎の多い民族である。ドイツ人たちは、遠い昔から自己を省察するとか、数多の人々が他人を詮索するような時間を費してきた。われわれドイツ民族のなかには、古代ギリシャやローマ、インド、イギリス、スペイン、古代北歐な

どの自然性があり、常にどこか遠くにある真の故郷を憧憬している。そのことは歴史へのパースペクティブが示している。すなわち、すべての他の諸民族は始めと終りのある道のような歴史をもっているが、ドイツ民族の歴史はその意味でいくらか相違している。

始原を求めようとする試みを常に繰り返してきた歴史なのである。われわれドイツ民族は、狂気なまでに多くの特性を備えており、高度な精神史における原初の集合体なのである。

いかなる思考体系にしても、いかなる世界観にしても、またいかなる政治理念においてもである。他の諸民族は彼らの歴史的過程のうちに、暗黒の原始時代に生じた原初的な特性を磨きあげ、消費してしまったのであるが、ドイツ民族においては歴史に乏しいだけにその特性はいまでも生き生きと残っている。奉仕すること、服従すること、誰かを尊敬すること、または何かを尊敬すること、盲目的に信じるという限りない欲求こそこの特性に決定的なことなのである。これらも原始時代から蓄積されてきた特性なのであり、今日の状況においても重要なものになるかもしれないし、また絶望的なまでに滑稽なものになるかもしれない。

ニーチエはかつて「ドイツ人は偉大なことを成就する能力をもっているが、彼らがそれをするか否かは不確定だ。」(Ein Deutscher ist großer Dinge fähig, aber es ist unwahrscheinlich, daß er sie tut.)と称した。

今日、民族が成長し自信をもてるようになるには指導者が必要である。真実の指導があればその短所は長所ともなるのである。<sup>(2)</sup>

ドイツ民族は政治的可能性として忘却されていたのであったが、ナポレオンが彼の行手にドイツ人と突然に遭遇した際、彼は非常に驚かされたのであった。現代の世界には武力そのものが現われる機会が少くない。歴史はその原始時代の本能の自由に回帰し、領土と海洋の掠奪が始る。われわれドイツ民族は、この時代に適応しうる民族なのであるか。(Sind wir also ein zeitgemäßes Volk?) と結んでこら。

以上が、シュペングラールの小論、「ドイツ民族性について」の要約である。

シュペングラールは、この小論の劈頭において、「民族の特性はその運命の所産である」と断定しているが、彼のいう「運命」とはいかなる観念であろうか。彼は他の著述において、「運命は根元現象、本来の存在方法としてあらわれる。その根元現象においては、生成の生きた理念(Idee)が、直観するものの目前に、直接にそれ自体を展開する。そして運命観念は歴史の全世界像を支配する」と称している。すなわち、彼のいわゆる「Schicksalidee」とは、有機体の内部において作用する有機的論理そのものなのであり、あるいはまた有機的必然的關係それ自体を指すのである。あたかも「自然」の世界においてこれを支配する論理が、一般に「因果法則」(Kausalität)であるのに対応するものであり、人間の歴史と社会においてはいわば有機的論理である。「この有機的な論理には、無機的な論理が対立する。運命とは描き出すことのできない内的確信を現わす言葉である。」と述べている。また他の個所で、「われわれは、特定の世紀、特定の国民、特定の仲間、特定の類型に所属する人間である。それは必須の条件であり、われわれはその下において、現存在に意味と深さを付与し、その下において、行為者は、言葉を用いても行為者たり得るのである。プラトンはアテナイ人であった。カエサルはローマ人であった。ゲーテはドイツ人であった。彼らが完全にそして何よりもまず、かくあったということが、その世界的影響の前提であった。」と称している。<sup>(5)</sup>すなわち、シュペングラールによれば、民族性とは歴史的世界において、その固有の有機的論理によって形成せられてくる個性なのであり、自己法則性(Eigengesetzlichkeit)なのであり、また不可換置性(Unersetzbarkeit)なものなのである。<sup>(6)</sup>

(1) O. Spengler, Vom deutschen Volkscharakter, in Reden und Aufsätze, SS. 131-134

(2) シュペングラールは、「政治的天性をもった民族は存在しない。存在するのは、ただ統治する少数者に、しっかりと掌握され、それゆえみずから体制のゆきとどいたものと感ずる民族のみである。」さらに、「衆群の政治的天性とは、指導に信を寄せること以外の何ものでもない。」とも言っている(H・コルンハルト、八田訳前掲書八五頁)。

(3) 笠信太郎著「シュペングラールの歴史主義的立場」第一部「世界観形式」昭和三年刊八一頁参照。

- (4) O・シュベングラ、村松正俊訳「西洋の没落」昭和五四年刊七九頁参照。
- (5) H・コロンハルト、八田訳前掲書七一八頁参照。
- (6) フリードリッヒ・マイネッケは、その論説「歴史における因果と価値」において、「実証主義は、たとえそれが集团的諸力をばもっぱら機械的のみに把握するものでは決してなかったにもせよ、しかしなおどちらかといえばより多く機械的にそれを把握する傾向を有していたといえる。また、より多く有機的なものにむけられている極く最近の傾向、これはシュベングラ<sup>(1)</sup>においてその極に達するものであるが、それは僭越にも、一切の個々の歴史的现象をば個々の大きい文化の種々な生物的形成法則から説明しようと企図するものであった。これに反してランケから始る科学的な歴史の取扱いは、一切の一義的かつ一般的な因果説明を断念し、従ってその結果、真の科学性を欠くという非難を被らなければならなかったのではあるが、しかしその代りにそれは、機械的、生物的、個性的な因果の三つの刻印の交錯をば、それだけ一層清新かつ直接的に観たのである。」と述べ、シュベングラの有機的論理に基づく歴史解釈を批判し、自己の説く「精神的・道徳的因果律と価値」について論じてゐる。(Friedrich Meinecke, *Kausalitäten und Werte in der Geschichte, in Staat und Persönlichkeit*, 1933, Berlin)

## 五、むすび

以上においてシュベングラの政治思想の一端を、二、三の小論説を介して垣間みてきたのであるが、「むすび」として私見を若干述べておきたい。本論においても再三にわたって触れたところであるが、彼の政治思想の根幹をなす思考形式は、有機体論理に基づくものであることは言うまでもない。

一九世紀初期のドイツ・ローマン主義の発現以来、いわゆる歴史主義の成立をうながし、この両者の思考形式は、カール・マンハイム(Karl Mannheim)の言う「ドイツ的思考」を形成してきた。政治・国家思想の学域における初期ローマン主義は、F・シェーリングの有機体論理を基礎とし、エドモンド・バーク(Edmund Burke)の思想的影響を受容したアダム・ミュラー(Adam Müller)の「政治原論」(Die Elemente der Staatskunst)において典型的に開花し、<sup>(2)</sup>一九世

紀中葉においては、パウル・ド・ラガルド (Paul de Lagarde) の「ドイツ論集」(Deutsche Schriften) において継承されたところである。<sup>(3)</sup>

一九世紀のドイツ精神史を方向づけたローマン主義と歴史主義的思考は、マンハイムの言説によれば、次のような特徴をもつ。

すなわち、「プロイセンにおいては、……一九世紀の最初の一〇年間にひとつの身分的反動が生じ、これが一九世紀の次元と文化的段階の上で演じられ、……歴史的にはるかかたにあった根本志向にたいして近代的表现を見いだした。ローマン主義が身分的になり、古い身分的思考がローマン主義的になる。この組合せから『ドイツ的思考』が今日にいたるまでもその根底にはつきりした刻印をもっている。かの独特な性格ができあがる。ローマン主義的特徴がその一面であり、歴史主義がその半面であるが、両者はひとしく、旧身分的思考がローマン主義と同盟をむすんだ、かの状況のなかで、歴史的生起のかの交点において結晶し、鮮明な力を獲得したものである。」と述べ、さらに「ドイツ的思考」について註釈を加えている。すなわち、「自由戦争とそれにつづく王政復古の時代は、ドイツ的思考の性格にとって決定的なものであった。『ドイツ的思考』は、一九世紀以来、ローマン主義的であり、歴史主義的であり、それはこの国に生まれた固有の反対ですら、なおそれから脱し切れないほどにまで根深いものである。ハイネ (Heine) はローマン派の敵対者であるにもかかわらずローマン主義的であり、マルクスは歴史学派の敵対者であるにもかかわらず歴史主義的である。」と述べている。シュペングラーの歴史主義とその政治観は、その文明史観を通じてこの「ドイツ的思考」の延長線上に位置していると言えよう。

そのことはしばらくおくとして、アドルノが「彼の予測をいままた思い起してみると、世界史自身の歩みが驚くほど彼の予測がそっくり正しいことを証明している」と言っているが、現代においてシュペングラーを再評価するとすれば、いかなる点にもとめられるであろうか。

かつてバターフィールド(H. Butterfield)が「物理的自然の全構図と人間生活の構造そのものを変え、近代的世界と近代的精神との両方の真の起源となったものは、『科学革命』(Scientific revolution)であつて、これに比すれば、ルネッサンスもリホーメーションも単なるエピソードにすぎない」と断言し、自然科学にもとづく技術が、近代世界を形成してきた原動力であると指摘したのであつたが、今次大戦後における科学主義の思潮は、社会・人文諸科学の領域にまで深く浸透し、経験的、実証的、微視的分析の方向に大きく傾斜していったことはあえてここに述べるまでもない。

科学主義の趨勢は、人類に対して成熟社会、経済の高度成長社会を構成するための技術化、工業化、情報化等々の数多のメリットを与えてきたことは事実であるが、その反面、物質的な側面においては、いわゆる旧約聖書の「バベルの塔」の比喩ともいうべき状況を呈してきていると言えよう。すなわち、合理の思想に基づいた科学主義の思潮は、宇宙計画、原子エネルギー開発から、生化学の微視的技術の領域に至るまで、人間は限りなく遠く、速く、大量に、詳細に、すべての点で間違いなくその目的達成をなしうるまでに至つたのである。

しかし、この現代状況は、人間が科学と技術に偏向しすぎ、本来、手段であり客体であるべき科学技術を目的化してしまい、人と技術の主客倒錯を結果してしまつたとも言ひるのである。すなわち、旧約聖書のバベルの塔の比喩のように、科学文明の塔を自己操縦や自己制御のできないまでに余りにも高く見事に作りすぎたがために、それは破壊されなければならず、根底から一切を喪失してしまふ結果にもならざるをえない状況を呈しはじめている。

シュペングラーの文明史観、いわばその「文化循環説」は、彼みずから「世界史の形態学」(Morphologie der Weltgeschichte)とも称しているが、「文化」(Kultur)と「文明」(Zivilisation)を判然と區別し、文化から文明への必然的進展という思考である。文明は文化の完成であるとともに、その終末であり、没落なのである。文化は生成なのであるが、文明は停滞であり死である。シュペングラーによれば、文化と文明の典型例は、古代ギリシャとローマであり、ギリシャの精神とローマの理知とは単に古代の事例としてではなく、常に繰り返される文化と文明との類型をなすも

のなのである。<sup>(5)</sup>

シュペングラーが対象としてとりあげた「没落しつつある」西欧文明は、世紀末から今世紀初頭の西欧であったが、現代はあの時代をはるかに超えて、世界的規模における機械文明の爛熟期の渦中にある。

この時代状況において、シュペングラーの予見を単なる過去のものとして忘却してしまうことは、「シュペングラーを忘れたがために、かえって彼の説の正しさがその報いとしてわれわれに迫ってくる」<sup>(6)</sup>（アドルン）ことにもなるのではなからうか。

- (1) F. シューリングの「有機体概念」は「Ideen zu einer Philosophie der Natur, 1797」の公刊によつて一般化されたことである。なお、F. Schelling, Vorlesungen über die Methode des akademischen Studiums, 1803. in Schellings Werke, Otto Weis Ausgabe, 1907, Band II, SS. 642-644 参照。
  - (2) 拙稿「E. ハークとドイツローマ主義の政治思想」法学研究第四八卷三号所収。
  - (3) 拙稿「Paul de Lagarde の政治哲学」法学研究第四三卷一〇号所収参照。
  - (4) Karl Mannheim, Das konservative Denken, 1926. 森博訳「マンハイム保守主義—思想的背景と現代性—」昭和三十三年刊八〇—八二頁参照。
  - (5) 高山岩男著「世界史の哲学」昭和一七年刊五〇頁参照。高山氏は、「古代が没落したやうに、西洋もまた没落しなければならぬのであるか。これに答へるものが彼の生物論的な文化の思想であり、文化の必然的な類落と没落を中心とする文化循環説に外ならないのである。
  - ……文化から文明への推移は、古代に於ては四世紀に行はれた。西洋に於ては十九世紀に行はれている。現今の西洋は正に死の文明期である。新しい遊牧民の集中するパリ、ロンドン、ベルリンなどの大都会、新しい修辭学に過ぎないジャーナリズムの流行、印象主義の感覺的無政府、芸術のための芸術の如きスポーツ芸術、これらは要するに、西洋が文明期に達してまさに没落せんとする徴候に外ならない。かくて西洋の没落は迫つてゐる、といふのがシュペングラーの結論なのである」(原文ママ)と述べられてゐる。
- (6) Th. W. Adorno, a. a. O., S. 49